

2.2.3.納骨堂におけるデジタル情報技術の導入動向

瓜生 大輔

本年度の研究では、都市部を中心に一般化しつつある「搬送式納骨堂」をはじめとする「故人を偲ばせるデジタル情報閲覧機能」を提供する納骨堂施設の訪問調査を行った。死者祭祀の現場における情報化および情報技術利用の状況について、具体的な情報収集に取り組んだ。筆者は2015年頃から搬送式納骨堂の調査を行っている。本報告書は本年度訪問した場所について述べるものではあるが、一部、最近5～6年ほどの変化についての考察も加える。

東京都内の搬送式納骨堂

浄土宗瑞華院 了聞（東京都港区）
浄土宗十方寺 本駒込陵苑（東京都文京区）
日蓮宗清立院 七福堂（旧称：永久の郷）（東京都豊島区）
日蓮宗仙行寺 沙羅浄苑（東京都豊島区）
天台宗東叡山浄名院 上野さくら浄苑（東京都台東区）
浄土真宗無量寿山光明寺 東京御廟本館（東京都荒川区）

東京都内のデジタル納骨堂

日蓮宗正龍教会 本所廟堂（東京都墨田区）

愛知県内の搬送式納骨堂

日蓮宗文久山妙見寺 思親閣（愛知県名古屋市）

関西の搬送式納骨堂

真言宗泉涌寺別院雲龍院 龍華堂（京都府京都市）
真言宗国分寺派宝蔵寺 大阪御廟（大阪府大阪市）
浄土宗医王山寿命寺 池田龍聖御廟（大阪府池田市）

東京都内の搬送式納骨堂

浄土宗瑞華院 了聞（東京都港区）

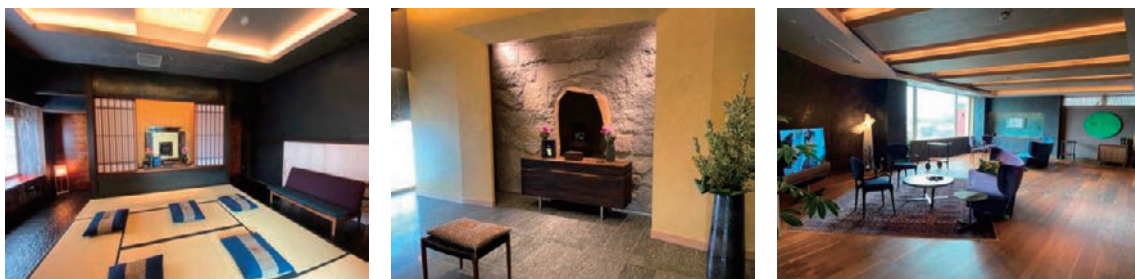
2021年3月にオープンした、中部電力とアーク不動産が出資した搬送式納骨堂。日比谷線広尾駅すぐ近くに位置する「最高級」搬送式といってよい施設だろう。すべての納骨ブースが個室であり、最安で192万円から最も高い部屋で400万円である。空いていれば時間無制限で使用可とのことである。他納骨堂への聞き取りによると、現在、東京都内での搬送式

納骨堂の売上は 5 年ほど前に比べると平行線といわれる。高級路線を打ち出した了聞が成功するかは注目に値する。

空間設備として的高级感を前面に推す一方で、搬送式システムや参拝ブースに取り付けられた液晶モニターなどは他の搬送式と同等だ。



受付／高級ブース契約者 VIP ラウンジ／個室



高級個室／個室／契約者が利用可能なラウンジ

浄土宗十方寺 本駒込陵苑（東京都文京区）

400 年以上の歴史を持つ浄土宗十方寺が所有し、元ニチリョク社員が設立した武蔵野御廟が運営する。3 階が 99 万円、2 階が 80 万円、計 11,000 基。年間護持費 12,000 円。担当者いわく、もともと経営的に良好な寺が所有する納骨堂であり、資金に余裕がある分を内装に回すことでコストパフォーマンスを上げられたという。武蔵野御廟は蔵前稜苑に続いて 2 件目の搬送式納骨堂運営である。

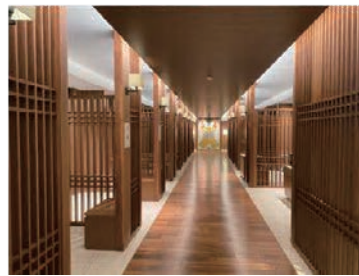
搬送システムは横型の厨子が特徴であるトヨタ製。参拝ブースに小さな液晶パネルがあるのみで、デジタル技術導入の点においてはごく一般的な仕様だ。機械式搬送システムは、トヨタ、IHI、ダイフクの 3 社が主流である。



外観／本堂／他宗派用



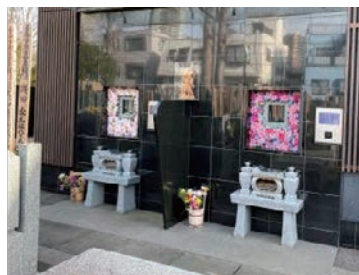
3階（99万円）納骨堂



2階（80万円）納骨堂

日蓮宗清立院 七福堂（旧称：永久の郷）（東京都豊島区）

雑司ヶ谷霊園に隣接する境内の外墓地区に併設される屋外搬送式納骨堂。もともと尼寺で今は2代目住職が管理する。雑司ヶ谷七福神めぐりの一つで、頻りに観光客が訪れる寺院である。搬送式は30万円（7年）からで、外墓地区画が数百万円、合葬墓が150万円で販売されている。以前は「永久の郷」という名称だったが、最近「七福堂」という名称に改称し、寺独自の営業・販売を開始した。



七福神巡りのお堂／搬送式ブースが2基並ぶ／合葬墓



外墓地／外墓地／搬送式ブース（契約者はICカードをかざして参拝）

日蓮宗仙行寺 沙羅浄苑 (東京都豊島区)

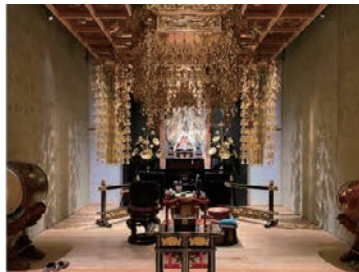
南池袋に位置するはせがわ運営の納骨堂。一般参拝室 90 万円、特別参拝室 130 万円、年間護持費 18,000 円。仙行寺は戦後、池袋での文化活動に注力してきた。近隣には葬儀会館、演劇ホールなどがある。住職のこだわりで沙羅浄苑にも「名所」となる「池袋大仏」を造成した。近隣には寺が密集する地域で、隣接する日蓮宗本立寺には広大な外墓地が広がる。

搬送システムはダイフク製で、はせがわ担当者いわく「比較的故障が少ない」とのこと。はせがわは、搬送システムは偏りなく3社とも導入する方針であり、現場でのノウハウが蓄積されてきている印象である。前述の通り、現在、東京都内の搬送式の売上は平行線であり、はせがわは、しばらく東京圏で新規の納骨堂建設は行わない見通しである。

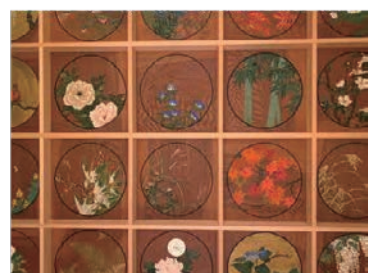
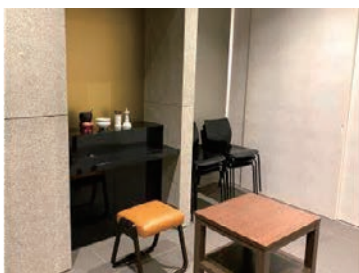
ビルそのものの敷地が狭いため豪華な印象は受けないが、コンクリート造りの内装に古い本堂から移設された天井画、日当たりの良い立地である本堂は居心地が良い。



1階にある池袋大仏(下部に永代供養墓)／隣接する日蓮宗本立寺／参拝客用ラウンジ



参拝ブース／本堂／参拝ブース



納骨スペース／参拝ブースと液晶モニター／本堂の天井画

天台宗東叡山浄名院 上野さくら浄苑 (東京都台東区)

上野寛永寺 36 坊の 1 つ浄名院境内に造られた、京王電鉄が初めて運営する納骨堂で建物は京王建設が建造。境内区画の運用を検討していた寺と、納骨堂事業を検討していた京王の意

向が一致したとのこと。日当たりの良い95万円の区画と、78万円の区画(年間護持費16,000円)。開苑4年で2,000/4,000基販売と好調。伺った当日も法事が多数入っており、参拝客もひっきりなしに訪れていた。気軽に入りやすい雰囲気があり、人々の日常生活に馴染んだ吊いの場との印象を受けた。担当者は、凝った意匠よりも使いやすさが特徴であることを強調していた。縁あって上野での「納骨堂第一号」の建設にいたったが、今後は京王沿線にも建て、沿線愛の強い住民から支持される納骨堂を経営したいと見受けられる。葬儀も月2〜3件執り行っており、京王メモリアルが(京王線沿いからやってきて)行う。

筆者が知る限り、上野さくら浄苑は、今日、都内でも最も評判のいい搬送式納骨堂のひとつである。要因は複数あると考えられるが、大きな特徴がアットホームな雰囲気である。いわゆる「ビル型納骨堂」のイメージではなく、寺院境内に溶け込んでおり、「近所のお寺にふらっと立ち寄り」ような温かさがある。いわば広尾了聞の対局にある印象だ。



境内入り口／参拝ブース (95万円) ／参拝ブース (78万円)



御法要		
御経絡所 法要時刻		
高内	宗願式	9:00
神山	宗願式	10:00
大橋	法要堂式	10:30
加藤	宗願式	11:00
長野	宗願式	11:30
宮元	宗願式	12:00
藤田	宗願式	12:30
川崎	法要堂式	13:00
川崎	宗願式	13:30
渡辺	宗願式	14:00

利用者用ラウンジ／境内内の単身用墓／訪問当日の法要スケジュール



住職のこだわりで契約者が一つずつ仏像を納める／外墓地

浄土真宗無量寿山光明寺 東京御廟本館 (東京都荒川区)

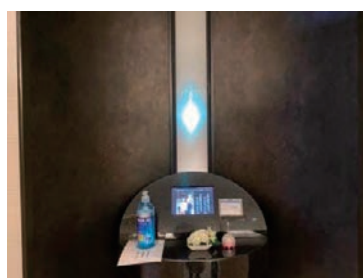
光明寺は岐阜県岐阜市に本坊を構える寺院で、数千基規模以上のビル型納骨堂のさきがけとして知られる。荒川区町屋の東京御廟と東京御廟本館をはじめ、新宿瑠璃光院白蓮華堂、

千葉市の稲毛御廟、沖縄県那覇市にも琉球御廟を開苑した。東京御廟本館は東京御廟完売に伴い、徒歩数分の立地で開業した。数年前に新宿瑠璃光院に伺った時と同様に、住職みずから出迎え、搬送式運営 15 年の実績を強調した。販売代行業者はつけず、光明寺雇用のスタッフにより営業しているという。

1 名用「ともしび」は 25 万円、埋葬数を後から増やせる「はくたい」は 55 万円からそれぞれ 2,000 基。「はくたい」は半数くらい契約済というが「ともしび」はこれからとのこと。私が知る限り、最も低価格な搬送式納骨堂の契約である。



建物正面／はくたい／ともしび画面



「ともしび」では、一般的な搬送式のように一家の銘板を拝むことはできない。代わりに、搬送されてくると青い光（左写真）が見えるだけで、下部にある小さな液晶モニター上で「故人情報」が見られるだけである。「未婚の叔父」「内縁関係」など複雑な人間関係の弔いニーズが多く、今後の展開が気になる興味深い商品である。

東京都内のデジタル納骨堂

日蓮宗正龍教会 本所廟堂（東京都墨田区）

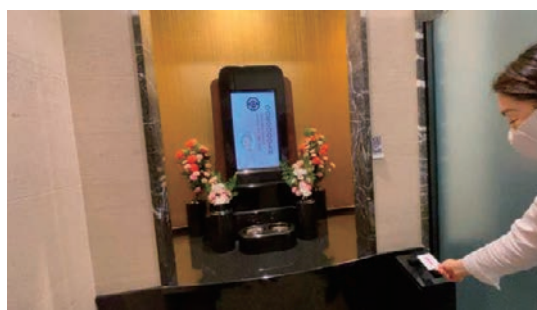
東京メトロ半蔵門線押上駅から徒歩圏内の「搬送式でない」デジタル納骨堂。搬送式と類似する、大きな縦型のデジタルモニターを配した参拝ブースを持ち、図書館の多層棚と同等の納骨スペースにプラスチック製の厨子を納める。契約者は、管理番号の振られた棚を一段契約するイメージで、参拝ブースで IC カードをかざすと「故人情報」が表示され、焼香ができるのは搬送式が提供する参拝経験と近い。搬送機械・システムに多額のコストが掛かっている搬送式にくらべると、本所廟堂は単身者用 24 万円、家族用 40 万円からと安価である。営業担当者は「人間の手で運び、丁寧に管理する」ことを強調していた。

企画・建設に携わる業者の話によると、搬送式納骨堂は、建造時に 10 億円以上のコストがかかると言われるが、その大半を搬送式倉庫システムの導入費用が占めるという。その一方で、契約者からすると、参拝時、〇〇家などと彫られた銘板を目にするだけで納められている骨壺を見ることはない。正確な調査結果などはないが、どれだけ多くの人が「搬送されてくるありがたさ」を感じているかは正直疑わしい。そのような状況を逆手に取って、参拝

のやり方は搬送式と同等であるデジタル納骨堂というコンセプトは、今後どのように展開していくのか興味深い。



納骨堂ビル／参拝ブース



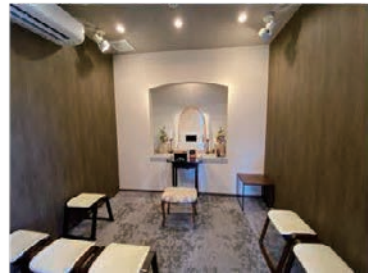
IC カードをタッチして参拝

愛知県内の搬送式納骨堂

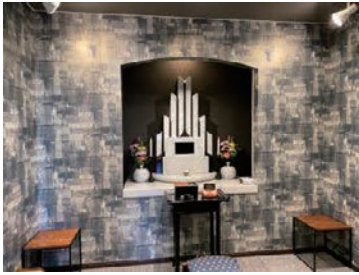
日蓮宗文久山妙見寺 思親閣（愛知県名古屋市）

名古屋駅から最も近い搬送式納骨堂。全て個室だが、寺直販により低価格で提供されている。一律 75 万円。護持会費 10,000 円/年。値段のバリエーションはなく、空いている個室はすべて利用可能である。親族以外も参拝可。私が伺った平日 13:30 頃も多くの参拝客がいた。連日法要の予約も入っている。あえて搬送機械を隠さない造りとなっており、搬送待機時には、子供たちが「おじいちゃん運ばれてきた！」と楽しんでいるという。私が知る限りで、このような仕様となっているのはここだけである。搬送システムを一種のエンターテイメントとして捉えた仕様である。

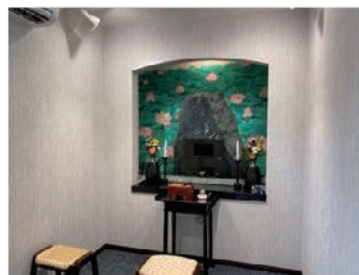
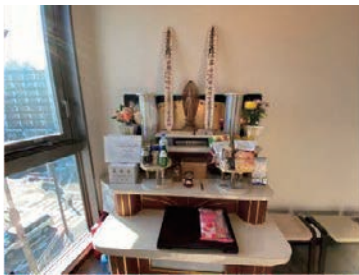
現在名古屋市内に 5 件の搬送式があるが、担当者の話を聞く限りは、決して売れ行きが好調というわけではなさそうである。車移動が主流の土地柄から、外墓地と比べて優位な点が少ない。また、東京都内は全収骨が主流のため、搬送式は「個人墓」か「夫婦墓」として購入される傾向が強いのにに対し、名古屋圏は部分収骨が主流のため「一家の墓」として慎重に選ばれる傾向が強いという。



ビル外観／参拝ブース（個室）／参拝ブース（個室）



参拝ブース（個室）／平日昼間でも多くの参拝客が訪れる／参拝ブース（半個室）



参拝客による供物／参拝ブース（個室）／参拝ブース（個室、古い仏像）

関西の搬送式納骨堂

真言宗泉涌寺別院雲龍院 龍華堂（京都府京都市）

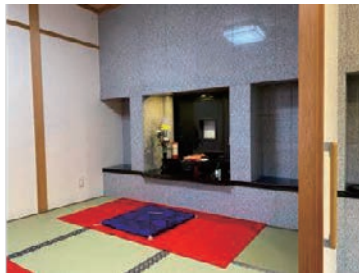
天皇家ゆかりの雲龍院(1372年創建)にとっては初めて一般人との縁をつなぐ納骨堂である。龍華堂開設前は、天皇家関係と、寺と親しかった方の墓のみがあった。一区画98万円、特別永代供養付138万円、計1,200基。年間護持費13,000円。2010年開業ですでに、半数販売済。日本全国から「墓じまい」して契約される方が多数いるようで、都市部の納骨堂では見られない「この寺に納骨堂を持ちたい、寺と縁を結びたい」人が契約している。本堂には納骨堂に納められた方の位牌が置かれ、朝夕勤行の特別回向が行われる。販売代行会社は使わずに、すべて寺の職員が見学対応・販売を行う。大半の搬送式納骨堂が資金繰りに困っている寺が業者の力を借りて本堂を「再生」し収益を上げるために作られている状況を考慮すると、雲龍院龍華堂は一線を画す印象がある。搬送式システムそのものは他所と大差なく、デジタルモニター等は備えられていない。



寺院正面／天皇家の家紋／納骨堂入り口



寺院の庭／納骨堂内部



納骨ブース／納骨ブース（個室）／厨子

真言宗国分寺派宝蔵寺 大阪御廟（大阪府大阪市）

2020年4月開業、新大阪から好アクセスのヤシロ運営の3件目の搬送式納骨堂。ファミリータイプ一区画100万円～、計6,000基、搬送システムはダイフク製。大阪の搬送式は様子見状態で、ヤシロも成功の確信があり乗り出したわけではないようだ。大阪の一家の財布の紐を握る決定権は父だそうで、広告を見てほぼ買うのを決めた状態で見学に来るといふ。

ダイフク製の参拝ブースはトヨタ、IHIと比べて派手な演出が多く見られ、常に新たな試みを模索している。大阪御廟では、液晶モニターが厨子よりも目立つレイアウトとなっており、デジタル写真表示が強調されている。現在のところ、参拝ブースのデジタルシステムは、すべて搬送機械メーカーが制作している。今後は、デジタルコンテンツ制作会社との提携が行われるのかにも注目したい。



納骨堂近隣のマンション前／正面／参拝ブース



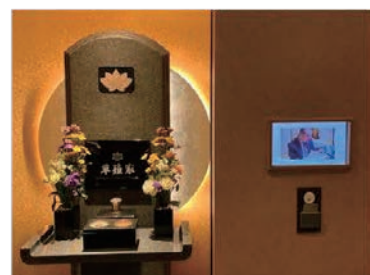
エントランス近くの装飾／納骨時のデモ／厨子



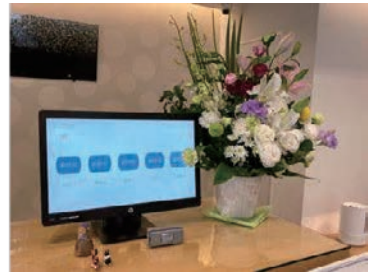
ひときわ大きなモニター／参拝ブース／1体ずつ収納できる永代供養墓

浄土宗医王山寿命寺 池田龍聖御廟（大阪府池田市）

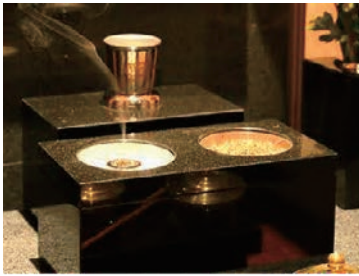
もともと長屋があった土地に、檀家（300家くらい）からの要望で建造された納骨堂で、住職が前線に立ち寺が直接販売している。1～2名：65万円、3名以上：85万円、合祀墓：10万円。すべて寺雇用のスタッフで接客・販売するが、広告・宣伝はヤシロに委託。1300年の歴史を持つが、阪神大震災で本堂全壊後再建した。岡村卓生住職は浄土宗の青年会（43歳まで所属可能）大阪支部長も務めていたという。もともと地域とのつながりが深い寺院であり、また熱心な住職の人柄もあり、売れ行きも良好な模様である。ビルの別フロアへの増設も検討中とのことだった。



入口／境内／参拝ブース



参拝ブース／納骨堂フロア／受付



焼香器／厨子／岡村卓生住職

今年度のまとめ

今年度は、東京、京都、大阪、名古屋の搬送式納骨堂、デジタル納骨堂の訪問調査を通して、納骨堂における情報化を調査した。現在、東京都内では、搬送式納骨堂が主流となりつつある一方で、飽和状態である。インターネット上での調査、検索が当たり前となった今日、購入検討者は何件も見学し、比較検討の上で納骨堂を選択するという。基本的に搬送システムや設備はどこもほぼ同じであるため、購入の決め手となるのは立地、施設の雰囲気、担当者の接客、僧侶（住職）への信頼、そして価格などである。長い「経営」実績を持つ東京御廟のように比較的安価なプランを充実させるところがある一方で、広尾の了聞のように超高級路線を打ち出すところも出現した。

個人的に注目しているのが、搬送式でないデジタル納骨堂（本所廟堂）や東京御廟本館が提供する単身用設備「ともしび」である。筆者は、かねてから搬送式は厨子を搬送する必要はあるのかについて疑問を感じていた。この答えにノーという結論を出したのが本所廟堂であり、イエスと答えつつ完全にその意義を形骸化させてしまったのが「ともしび」である。一方で、本所廟堂や大阪御廟のように大型デジタルサイネージを擁する参拝ブースが、今後どのような発展を遂げていくのか、「自動搬送」に代わる価値として根付くのかについて、検討を重ねていきたい。